

2010年度滝久雄基金海外研修報告書

2011年3月5日から29日までの一ヶ月弱、ウガンダで研修を行った。主な活動は、ウガンダ議会でのインターン、およびNGO あしながウガンダでのボランティアである。

私がインターンを行ったウガンダ議会図書研究部・研究課（Research Division, Parliament of Uganda Department of Library and Research、以下「議会研究課」）は、議会において討論される科学技術関連の問題（医療、統計、農薬、道路整備、電力、教育など）を調査、情報整理し、議員をサポートする役割を担っている。議会図書研究部部長のイノセント氏いわく、「他の東アフリカ諸国には類のない、突出して洗練された議会活動支援組織である」。同様の役割を持つ英国議会科学技術室（UK Parliamentary Office of Science and Technology; POST）との交流（インターンシップやワークショップの開催など）もある。

私の世話をしてくれたリチャード氏（上級調査員）、及びピーター氏（調査員）とインターン初日に話し合い、ウガンダのエネルギー情勢について調査させてもらえることになった。この国のエネルギー需要は、木炭等の木材熱利用が約91%を占めており、料理や暖房等、人々の生活を支えている。一方で、森林の退化、二酸化炭素の排出、利用者の健康被害など、多くの深刻な問題を抱えている。また、電力需要はエネルギー全体の0.1%にとどまっており、電力アクセスは全人口の10%弱しかない。これは他の近隣アフリカ諸国と比較しても最低の数値であり、国民全体への電力供給も長年の課題となっている。

インターン中に、エネルギー省の担当事務官から話を伺う機会を得た。ウガンダは2003年にエネルギー政策、2007年には再生可能エネルギー政策を包括的に策定しており、そのなかで中長期目標も明確に設定している。しかし2011年現時点において、これらの目標どおりには進んでいないと担当官は話してくれた。「ウガンダには再生可能エネルギーを含め、多くの投資機会がある。ナイル河を利用した小水力発電や、送電線のない地域での太陽光発電利用等だ。そのための補助金など、政府からの援助も整っている。それにも関わらず、国内外からの投資活動が予想以上に集まらなかった。」担当官のこの言葉は印象的であった。ウガンダのエネルギー政策に目を通してみると、Public Private Partnership (PPP) を積極的に推進していた。それがうまく進まない理由の一つとして、政策や補助の企業への周知が不十分なのではないかと感じた。

上記のインターンシップと平行して、議会研究課の調査員と度々意見交換する機会も得た。インターン最終日には議会研究課の業務について議論を行った。

議会研究課の研究員は様々な問題点を話してくれた。横暴な議員が少なからずおり、業務に支障を来す場合があること。研究員の数が絶対的に足りず、業務の質を保つことができないこと。調査のクオリティを向上させるための教育の機会が得られないこと。このような問題点は、議会図書研究部の予算制約やウガンダ人の国民性など、短期的な転換が難しい原因をその根底に抱えていると感じた。

しかしそのなかでも、特に若い世代の研究員が問題意識も知的好奇心も高委と感じた。長期的に、こういった世代が中心となって、今後ウガンダをゆっくりと好転させていくであろうことを感じた。

3月後半で活動したあしながウガンダは、エイズ孤児に対して教育活動を行っている日本のNGOである。算数、英語、ライティング、リーディング、科学、音楽、体育などの授業を教えている。土曜にはケアプログラムも行っている。

ある日、英語と算数の中間試験を見学、採点の手伝いをさせてもらった。中間試験では「大学に進学したい」という明確な目標を持って、前日までしっかりと準備をしてきている子供もいれば、あからさまにカンニングをしてなんとかその場をしのぎようと努力している子供もいた。その風景は、日本と似ているところもあった。一口に「子供」といっても、当然のことながら様々な子がおり、

それぞれの背景があり、それぞれの学習に対する動機があるのだと感じた。

他の日に私が参加した体育の授業では、ドイツ人ボランティアの教師のもと、サッカーとドッジボールを行った。照りつける太陽の下、子供たちは裸足で、グラウンドを全力で走り回っていた。サッカーをしていて疲れてくると、子供通しの言い合いや暴力がおきるようになり、泣きだす子供もいた。現地語だったので何を話しているのかは理解できなかったが、闘争本能のようなものがとても強のだろうと感じた。ドッジボールでは、終始、現地人の先生（大人）たちが本気で子供にボールを当てて大喜びしていた。（ボールを投げつけられている子供以外の）子供たちも当然楽しんでた。日本人の私やドイツ人の先生は、大人げないその様子に苦笑いしていた。現代の日本より大人と子供の上下関係が絶対的なのもその一因なのかも、とおもった。

ボランティアのほかに2泊3日のホームステイも行った。パイアスという、あしながウガンダに以前まで通っていた男の子の家にお邪魔した。パイアスは今年高校を卒業し、現在は大学受験のための準備をしている。母親と兄妹二人の四人家族だ。エイズで父親が他界しており、母親は公共バスの車庫での夜間警備のアルバイト収入と、アクセサリーを作る内職の不定期収入で子供たちの生活費と学費を賄っている。昔は地元の保育園で先生をしていたが、給料が少なかったため退職したそうだ。私がホームステイしている間は、早朝6時頃に帰宅し、床についていた。

パイアスの家は送電網につながっておらず、電気は使えない。主なエネルギー源は木炭で、木炭用の料理ストーブやアイロン機を備えていた。また、あしながウガンダを経由して日本の三洋電機が無償提供したソーラーランタンを利用していた。ソーラーランタンを利用する以前はロウソクを利用していたらしく、状況は格段に良くなったのだろうと想像する。

私が宿泊した二夜とも、高校生の兄妹は夕方に帰宅してから10時頃に寝るまで、パイアスや私がラジオ（電池利用）を聞いている居間で宿題を行っていた。勉強も良くするし、集中力も非常に高いように思った。

ウガンダの周辺にはスーダンやソマリアなど、今なお紛争が続く地域がある。ウガンダでも十年以上前まで混乱が続いていたし、昨年ワールドカップの時期にもテロが起きた。日本を発つ前の私は、そのようなわかりやすい情報ばかりを集め、ウガンダの可能性を感じとるセンスに乏しく、どうしてもリスクばかりが目についた。しかし実際に滞在してみると、首都カンパラの繁華街ですら命を脅かすような犯罪は少なく、ビジネスチャンス、研究や教育のニーズも豊富にある印象を受けた。ビジネスのために滞在しているインド人や中国人、現地大学や援助機関で活躍するドイツ人をはじめとした欧米人も数多く見られた。そのようななかで、現地の人から「どうしてウガンダには日本人が少なく、関心を持ってくれないのか」と質問されたときは、日本人である自分の国際感覚の乏しさを申し訳なく思った。

ウガンダは近年力強い経済成長を続けており、経済危機下でも5%以上の成長を見せた。私が毎日悩まされたダウンタウンの渋滞は数年前には見られなかった光景だということも聞いた。国営送電会社の年次報告書をいくつか見比べて、急速に送電網が広がっていることもわかった。

ウガンダは赤道直下にあり、日本のように恵まれた気候条件下にはない。日中歩き回ったり、集中して本を読んだりしていると頭痛に悩まされることもあった。体力を消耗するので一日の労働時間も限られてくる。しかし他の熱帯地域の人と比べて、朝からアルコールを飲んできたりはしないし、まじめで親切な人も多かった。日本人と似ている印象すら感じさせるウガンダ人にもたびたび出会った。資源も豊富にあり、今後の発展の可能性を感じることができた。

一ヶ月は短かった。自分でもそう感じたし、お世話をしてくれた現地の方々にも再三言われた。しかしその中でも、これだけ凝縮された日々を送ることができたのは、日本及びウガンダの方々の様々な助けがあったからであり、心から感謝しています。この経験を、自身の将来のキャリアに活かせるよう、がんばりたいと思います。本当にありがとうございました。